

土のある
暮らしと
文化

土と大地の芸術が つなぐもの

北川 フラム *Written by Fram Kitagawa* アートディレクター

この15年ほど、過疎の地域にかかわって地域おこしのプロジェクトのディレクターをやっている。私の基礎は美術だが、仕事は地域おこしのディレクターだ。そこで感じてきたことを書こう。

新潟県が長野県と接するあたり、長野県の栄村と新潟県の津南町は秋山郷といってマタギの郷であり、昔、鈴木牧之が『北越雪譜』に記した秘境だが、この津南町と十日町市を含む760km²の巨大な地域で「越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭」というお祭りを、2000年の第1回を皮切りに、3年毎に行ってきた、来年は第5回を迎える。まずはそこでの話だ。

2003年の第2回に古郡弘というアーティストがやってきて、減反でその年使われていなかった棚田2枚をベースに巨大な土の砦を築いてしまった。この話が愉快だ。

一言でいうと、このアーチストは計画的でない。前の回も違う集落の神社近くに、工事用単管を800本も差し込んで、それを手懸りに一人でえんえんと神様の産室をつくりだして、はじめは何をやるのかと疑いの目で見ている地域の人が、やがては驚き、ついには哀れになって手伝い出し、子供たちが布切れでその土の産室を荘厳したという、いわくつきの作業をした人だったからだ。製作中に覗きに行ったが、その土蔵から出てきたのは顔が赤銅色で身体全体が黒褐色の土人形の古郡さんだった。誰にも助けを請わない、先のこ

とは考えていなきそう(?)な、そのアーチストは、今度は田んぼを使いたいという。それならば、と大字全体が協力的でパワフルな下条地域に話をもっていったのだ。

田んぼ一反を使って砦のような土壁をつくるという。田んぼの土と、コップと、藁を用する伝統的な工法である。しかし仕事は遅々として進まない。いくら協力的といっても農村地帯のお年寄りには忙しい。仕事のあいまを縫っての作業はあと3週間という時になってまだ予定の半分にもいっていないかった。そこでこの地域の長老たちはとんでもない号令を地域住民に発したのだ。

「勤め人は有給休暇を消化して現場に入れ、子供たちは学校が終わったら、家に帰らなくてよいから現場に行け」。こうして、ほとんどが雨に崇られた開幕前の20日間、坂道に板と崖を引き、畔に滑り、泥田のなかで格闘し、当初の計画を超える隠し砦のような作品を完成させたのだった。まさに映画「七人の侍」の戦いのシーンを彷彿させるような作業だった。国道を折れて幾つか曲がると、棚田に聳える土の城壁はまさに圧巻であり、往時の百姓一揆を思わせる壮観だった。噂は噂を呼び、訪れる人5万人余。はたして会期終了時、来るべき豪雪と、来年は田植をしななければならず、この城砦を取り壊さねばならぬので、土地の人々の落胆は見るも気の毒なほどだった。取り壊しの前日、ここでコンサートが開かれたが、松明が煌煌と照らされる



古郡弘「盆景一Ⅱ」2003年大地の芸術祭出品作 於：十日町市下条地区

棚田の砦舞台を囲む人々で、あたり一面の道と田んぼはギッシリと埋まり、その熱気の凄さは今も語り草になっているほどである。

この下条地区の願入がんにゅうという6軒しかない集落は、中越震災時、震源地に最も近く、かなりの被害が出た。そのうちの1軒がかなりやられ、ご家族は町に引越せざるをえなくなりました。

「大地の芸術祭」の精神は「その地域の資源を発見し、それを磨き誇りにする」ことだった。人口減のなかで、空屋、廃校が増えていく。

それは残念な事実であるが、そのいわばマイナスの資源をこそプラスの資源に変えなければならぬ。「あるものを活かして、新しい価値を生もう」という気持ちが根底にあり、ただ空屋や廃校を「ああ、そうですか」と放っておくわけにはいかない。そこで大棟梁である故田中文男氏に来ていただく。文男さん曰く「これは使える」。これを受けて「陶磁

郎」編集長の入澤

美時氏がディレクターとなって、民家研究の第一人者安藤邦廣氏が改築をし、焼物の名人8人が参集した。命名は「うぶすなの家」。

できてみてこれは、北大路魯山人の「春風萬里荘」を超える民家レストランだったと思う。かたや古い民家のなかに陶の名品があるのに対して、家が焼物によって生きているのである。織部の鈴木五郎がつくりあげた巨大な釜で炊かれたコシヒカリを金沢の村卓夫が丹精こめて細工した土間で、車座になって食べるのである。風呂は美濃の原清嗣、手水鉢は益子の吉川水城、そして食器は



鈴木五郎「青織部のかまど」
十日町市願入地区の“うぶすなの家”

土の研究者、故吉田明の見事な茶碗であり、小鉢であり大皿である。さらに唐津の川上清美の花器がある。

「大地の芸術祭」は規模とその範囲からいって世界最大級の国際展である。しかし、こんな田舎で、うまくいく筈がないというのが大方の予想だった。また県の事業とはいえ、6市町村の議員の先生方の反対があり、住民にも現代美術展そのものに対する反発、まわりの方法としての疑問があり、2000回を超える会議、説明会をしての難産だった。それが2009年の第4回展では30万人もの観客があり、地域が元気になっただけでなく、来た人も元気になるという評価をいただいた。成功の理由として2000を超える大字それぞれに寄り添ったこと、広い里山を旅すること

によって、旅行者は全身を通し、五官いっばいに遺伝子の震えを感じたこと、子へび隊と称した老若男女、都市のサポーターが頑張ったことなどが挙げられるが、注目すべきは「土」の働きだったと思う。

古郡弘の「盆景Ⅱ」や「うぶすなの家」以外にも越後妻有の芸術祭では「土」に絡んだ作品が多かった。日本有数の稲作地帯だから、当然といえば当然なのだが、例えば田んぼをテーマにしたものでいえば、イリヤ・エミリア・カバコフの「棚田」、大岩オスカルとクリス・マシューズの「案山子」があり、土そのものを材料にした蔡國強の30mの登り窯が美術館となる「ドラゴン現代美術館」、キム・クーハンの「かささぎたちの家」という集会所、杉浦康益の「風の砦」、磯部聡の「手の知」、山本健史の「掃天帯地―天水越の塔―」という塔もある。

焼物が重要な意味をもったものでは水内貴英のツリーハウス「ミーツ」、集落の人全員がそれぞれの茶碗をつくったカナダのリンダコヴィットの「名前蔵」。あるいは3回にわたって信濃川をテーマにした磯辺行久の川の蛇行に関する「川はどこにいった」。河岸段丘の切り通しに高さ30m・幅140mの足場を組んだ「信濃川はかつて現在より25メートル高い位置を流れていた」。蛇行する川をショートカットして水田に替える瀬替をテーマにした「世界太鼓フェスティバル」など枚挙に暇がない。

もともとこの地域は、縄文中期の4500

年前、「笹山遺跡」「沖ノ原遺跡」から国宝、重文級の縄文土器を産出する河岸段丘に集落があったところだ。鮭の遡る川、ドングリ、トチなどの広葉落葉樹の林があり、今ほどではないとはいえ豪雪も敵から攻められにくい。動物を獲りやすい等、自然とダイレクトにかかわった時代には、それなりの生活が可能だった地域だ。ちなみに辻惟雄先生は『日本美術の歴史』のなかで日本美術の特質として次の3つを挙げている。

アミニズム・遊びのころ・デイトールに對するこだわり（飾りといってもよい）

これらはまさに火焰型土器といわれた笹山遺跡の国宝そのものことではないかと思われる。土に對する信仰、容器のへりをこまめに飾りたて工夫しつくられたあれらの土器たちは、まさに専門家ではない人たちによって、その共同体から生まれ出たものと考えられないだろうか。

約15万年前、北アフリカに生まれたイヴと呼ばれる女性からのDNAを引き継いだ人類が現在の地球64億人なのだと知った時には驚いたものだが、このことは地球上の各地域、そこで生きる民族、その生活についてシンブルで明確な関係を教えてくれる。約5万年前からイヴの子孫たちは地球上に散っていく。食料を求めて、あるいは好奇心のせい。各地域の気象、地形、土壌にあわせて生きていくためにどれ程多くの困難があったか想像するに難くない。人間個人のレベルでいえば、

皮膚の色、体格、身長、運動能力等、そこで生きていくために変化する。それを私たちは民族といい、近代の国民国家の枠組としてきたのだが、その話はともかく、そこでの何千世代かの生活の蓄積が私たちの現在の文化だということとは誰でもわかることだ。この文化の差異が地球規模でいえばとても大きな意味をもつ。文化、習俗の差を民族の差によるものといってきたが、それではもうとおらない。では、どう控え目に見ても、人類の文化の一翼、それも重要な部分を日本が担っているのをどう説明したらよいのか。縄文土器から始まって装飾古墳、埴輪、独自の仏像・仏画の仏教美術、室町の文化、桃山の絢爛豪華な障壁画、さらに戦国の陣羽織・小袖、そして浮世絵をはじめとする江戸時代の町民文化等々。これらは人類の幅を明らかに広げている。それが民族の差異でないとしたらどうなるのか。そこで私たちは日本列島に行き当たるとの。

栗田宏一は平成の合併前の3232の市町村全部の土の採集をライフワークとしているアーチストだ。彼はサラリーマンだったある日、自分が生き、そこに立っている土とは何かを知りたいと思って、それ以来、奥さんと共に日雇い労働者をやってお金をつくり、軽トラックで日本各地を巡るといふ生活サイクルで生きている。この間、私がかかわった「大地の芸術祭」「水と土の芸術祭（新潟市）」「瀬戸内国際芸術祭」に請うて参加してもらった。そこでは各地で採集した土を、そのまままで



栗田宏一「ソイル・ライブラリー・プロジェクト／越後」2006年大地の芸術祭出品作 於：十日町市南鑑坂地区

カーに容れたり、盛ったりして展示するのだが、その配置、空間構成がとてよく、中途半端な製作より私たちを納得させる美しさなのだ、それを見て驚くことがある。例えば新潟県内365カ所の土の色が皆違うの

である。そして栗田宏一によれば、これほどの土の違いが、この狭い列島の土にあるというのは他に例を見ないことだという。

それはひとつの仮説となる。黒潮と親潮がぶつかる島、それは大陸からの季節風をもろに受ける弧状の島で、脊椎のように列島中央に山脈が走り、そこにぶつかった水蒸気は一泊二日といわれる急流になつて海に注ぐ。水は岩を砕き、水から生まれた微生物もまた岩を土に変えていく。この豊かな、しかし統御の面倒な川。水とつきあい、多種多様な土と親しみ、それを活かしてきたのがこの列島の人々なのではなかったか。

越後妻有、あるいは新潟全体に流れてきた時間を想う時、その川と土との親和は実によくわかる。平らな土地がない越後の山、そして湿地。ここに行き着くしかなかった人々と共に生きるために、棚田をつくり、瀬替をし、泥流のなかに稲を植えて育ててきた。それが明治維新の日本の人口3千万人のうちの6%を養った米どころの越後なのだった。が、2004年の中越大地震、今年3月12日の長野県北部地震で明らかになったことがもうひとつある。それは昔からの棚田がほとんど崩れていない

のに対し、最近の計画、圃場整備の田がかなり崩れていることだった。古人は地下水脈だけでなく、土の浸透性の差まで深く知って畔をつくっていたのだった。この畔づくりの技術と、縄文の土器と大陸からの仏教受容のための塑像の技術に通底するものがあるのではないか。土を通して磨いた手の動き、それが頭脳と交換作用することによって、私たちは実にデリケートな作業をするようになったと考えられる。

越後妻有の芸術祭では土という私たちの生活、食事、文化ときわめて密接な素材を多くのアーティストが使用し、遊び、活用することによって地元の人々だけではなく、多くの人々に親しまれたのだと思う。「土」こそ私たちの遺伝子のもとなのだ。

CEL

北川 フラム (きたがわ・ふらむ)

アートディレクター。1946年新潟県生まれ。74年東京芸術大学美術学部卒業。主なプロデュースとして、「アントニオ・ガウディ展」「アバルトヘイト否！国際美術展」「フアール・リッペン展」「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」など。主な著書は、『逸格の系譜―愚の行方』(現代企画室)、『大地の芸術祭』(角川学芸出版)など。